といふことを調べて見るが近道であるといふやうな考からその方面を調査して見た。その結果、色々の點を擧げ得るに至つたのであるが、その顯著なる一事實として、社會組織が彼我の間に著しく異つて居ることを認むるに至り、それから段々說明の步を進めて、此の社會組織が、我が國民の忠君愛國の精神の熾烈なる一原因であるといふやうに說き做さるに至つたのである。

然らば彼我の間に、社會組織が著しく異つて居るといふのは如何なることであるかといへば、それは外でない。我が國の社會を構成する所の單位は「家」であつて西洋のそれは「ファーミリー」である。此の兩者は族制の上から見ると全く異つて居るもので、決して同一のものではない。西洋で今日ファーミリーといふものは、夫婦と子供とより成り立つ所の共同團體をいふものであつて、其の上に親、祖父母、先祖といふものがない。夫婦の前に家なく、夫婦の後に家がない。子供が成長して獨立の生計を營むやうになれば、親の家を出でて別に一家をつくるのである。而もその家は、親の家とは別なものであつて、全く新たなる家である。故に西洋でいふファーミリーといふものは全く一代限りのもので家督の相續といふことはない。

勿論是にはとりのけがあつて貴族はその榮爵を世襲する。殊に英國の貴族にはその家筋、來歷を尊ぶの風あるが、それ等は社會全體から見れば少數の除外例であつて、一般の社會からいへば社會組織の單位はファーミリーであつて、そのファーミリーといふものは右に申し述べたやうなものである。然るに日本で「家」と稱へて居るものは、そのファーミリーとは異つて居る。その「家」を構成するものは、現在の夫婦と、その子供とのみではない。それ等の前に親があり、祖父母あり、先祖あり、後に子あり、孫あり、曾孫がある。現代の家族は唯單に「家」の一節一段を構成するものに外ならない。その「家」の代表者として戶主卽ち家長といふものがある。しかしその現在の戶主はその家の絕對の主權者ではない。親から「家」を承けて、之をその子に傳ふる執政官、代官の如きに過ぎぬやうなものであつて、主權者は「家」そのものである。故に戶主たるものの第一に心得べきことは、親より承けたところの「家」の格式、財產、名譽等を落さず、汚さぬやうにし、出來得るならば倉の一つも建增し、田地の少しも殖して、之を子に傳へようとすることにある。故に日本でいふ所の「家」といふものを構成する所のものは、單に現在の家族ばかりを指すもの

ではなく、過去のも、未來のも、含んで居るのである。西洋のファーミリーには親權はあるが戸主權はない、日本の家にはそれがある。前者は夫婦が基礎で、横の統一になつて居り、後者は親子相續が基礎で、縱の統一になつてゐる。是等が、日本で「家」というて居る所のものと、西洋で「ファーミリー」というて居る所のものと異つて居る所で、社會組織の異つて居るといふのは此の點を指すのである。

然らば、其の「家」を社會の單位とするものと「ファーミリー」を單位とするものとが、如何なる譯で忠君愛國の精神の强弱に關係するやうになるかといへば、論者の說明する所は斯うである。西洋の「ファーミリー」のやうに家を現在の夫婦一代限りのものとせば、其の夫婦間の間には隔意のない眞底から利害休戚を共にしたる一致團結も出來ようが、子供が成人して皆獨立した家を構へるやうになると、その親子間の一致團結は自然弱からざるを得ない。親子間の一致團結の力が弱いといふことは、親の子に對する慈愛心が弱く、子の親を思ふ孝行心が弱いといふことになる。自然、我は我なり、人は人たりといふ氣分が勝つて、所謂個人主義となる傾向がある。然るに之に反して、日本でいふ「家」といふものになると親子相離れず

に居るが故に、その間の情合は自然深くなる。それにその「家」といふものは先祖以來代々引き續いて來た、相續不斷のものが存在するといふやうに考へると、その「家」を組織して居る所の各員は皆その「家」を中心として甚だ鞏固なる一致團結を爲すことが出來る。慈愛、從順、協同、犧牲等の精神はこゝに養成せられるのである。それに加へて祖先を尊崇するといふ風が起る。祖先を尊崇する事になると、同一祖先から分れた同族又は一族間の親密と和協とを促がすことになる。斯くして我が日本では、孝を以て一族の結合を圖る大綱とするやうになるのみならず、社會統一の大部分も亦、擴充せられたる孝を以てせられるといふことになるのである。

更に之を日本國民全體より見たならば國民全體が一家族である。皇室を大宗家として、日本國民全體が綜合家族制をつくつてゐるともいへるのである。それ故、皇室と國民との關係は一方よりは君たり臣たるの關係であつて、一方よりは本家分家の關係である。唯に君臣といへば、支那流でいふやうに、君臣有義で義理一片の關係となるのであるが、それに加へて本末の關係があるので、實に親子又は祖

先と子孫との關係となるのである。從つて日本の忠は西洋や支那の忠義のやうな薄つぺらのものではない。卽ち雄略天皇の御遺詔の中にも、「義乃君臣情兼父子」と宣はれて居られる、義理の上からは乃ち君臣なれど、情誼の上よりは父子であるとの御趣意かと恐察し奉るのである。義理一片ではやゝもすれば薄くなる、算盤勘定の冷いものになる傾向がある。然るに我が皇室と、我等臣民との間には父子の情誼があるので、甚だ緊密な而して溫い强い結合が出來たのである。若し我が皇室と臣民とが單に義理の一片の關係であつたならば、此の美しき歷史は出來なかつたであらう。我が日本に於いて忠義の心の盛なるのは主として此の綜合家族制に由るもので、又忠孝一致といふのもこゝから生じて來るのである。論者の日本の忠君愛國の精神の熾烈なる原因の說明は以上の如くである。

然るに他の一方では、その反證ともいふべきものが見えて來た。それは他でもない。日本道德の大綱たるべき忠孝に對して懷疑的破壞的態度を取るやうな現象が社會に現はれて來たことである。論者は之を以て個人主義の極端なる弊害なりと解し、その弊の本づく所は家族制度の動搖しかゝつた處にあると見た。卽ち個人主義の弊は家族制度にまでも浸潤して、之を破壞せずんば已まざるが如き有樣を示して來たものであると考へた。斯くては日本道德の大綱までも泯んでしまふことになつて國家の一大事であると憂慮し、今に於いて家族制度を確立しなければ、その弊測るべからざるものあらんといふので、こゝに家族制度の問題は思想界、敎育界の一大問題として取扱はるるやうになつたのである。

ロ、婦人の家庭に於ける位置　日露戰爭後、各方面の施設が急速の進步をなしたと同じやうに、女子の敎育の如きも俄然として進步し、且つ普及するやうになり、又一方では經濟上の變動の爲に女子も獨立の生計を營まねばならぬやうになつて、獨立に職業を取るやうになり又取り得るやうにもなつた。さて斯うした新しい敎育を受けた女、獨立の生計を立てて居る女、是等の女子の眼には今日の日本の結婚といふものは甚だ恐しい、危險なものやうに映じたのである。夫の無上權力の下に、重い手枷足枷をはめられて五分と我が身で我が身を動かすことが出來ない。それのみならず、舅姑が常に猜疑の眼を瞠つて干涉の手を絕たず、時としては惡口、罵詈、冷評、皮肉を浴せかける。加之、鬼千匹の小姑が意地惡く、つらく當つて來

る。三從七去は今日の民法にはないことで、今日の民法は立派に妻たるものの權利を認め之を保護して居るのであるが、實際は矢張り三從七去主義が行はれて居るやうな有樣である。斯ういふ中に這入つて三方四方を圓く治めて家内に波風を起さしめまいとすれば、自分の人格とか見識とかいふものは全然之を沒してしまつて、唯一つの木偶になつて始めて出來ることである。是が今日の新教育をうけた又獨立生活の手段を捉へた女子には非常に恐しく又危險に感ぜられることである。更に他の方面から考へると、婦德の最も大切なるは貞節であるとして八ケましく嚴重に責められる。もし貞節の一德に缺くる所あれば他に缺點がなくとも、その女は全然廢物になつてしまふ。如何にも貞節は婦德の大切なものに相違あるまい。しかしそれは男子には必要のない德であらうか。男の方では蓄妾が認められるのみならず、男の腕と稱揚せられる氣味合がある。啻に蓄妾ばかりではない、娼婦に戯れて猶世間に紳士扱ひをせられて居るものさへ尠からずある。天下にこんな片手落のことは又とあらうか。されば、今日の嫁入りといふものは恐しい危險なものであるばかりでなく又不公平の甚しいものである。

今日の結婚を此の如く觀察した婦人等はその原因を家族制度に求めた。此の制度があるので舅姑もあれば、小姑もある。而して又、夫に蓄妾ぐるひをさせる口實をも與へることとなる。それ故、此の制度を改めない限り、女子の家庭に於ける位置を高めて之を安固にすることは出來ぬ。斯く思ひつめて、如何にか獨立の生活を營む手段を持つた處の婦人は所謂獨身主義を振り廻はすやうになつた。是等が族制改革の急先鋒となつたのである。一方では又此の聲に驚かされて良妻賢母といふことを女子教育の旗幟として、家族制度の維持に努めようとするに至つた。此等の事情で又家族制度の問題は思想界・教育界の問題となつたのである。

二　社會の結帶としての家族制度

以上第一節に叙述したやうな事情で、家族制度は、我が思想界・教育界の問題となつたのであるが、さて之を問題として段々調査して行くと、此の制度は直接に忠孝の基礎を爲すばかりでなく、その他に猶澤山の道德上の意味を含蓄して居るもの

であることが明かにせられた。そは「家」はバウルゼンなどが、西洋のファーミリーのみを見て說いて居る所の、親子、兄弟等の關係に於いて全然小社會を形成して居つて、そこに色々の道德上の訓練が施されるといふ旨趣を含蓄して居ることはいふまでもなく、又前節に述べたやうに、一家族の各員の間に、慈愛、從順、協同、犧牲等の精神が深く養はれるやうになるばかりでなく、——是等は、無論「家」の有つて居る大なる道德上の旨趣に相違ないのであるが、此の外にも、廣く社會の結帶として淳厚なる風俗を維持し、篤實なる人情を扶養するに極めて重大なる力あるものなることを闡明せられるやうになつた。それは外でもない。隣保鄕黨の一致團結を固くするといふことである。今、家族制度の比較的能く存續せられて居る農村等に入つて、その事情を見るに、第一結婚をするのに甲某の男と乙某の女と結婚するとはいはずして、甲某の家と乙某の家と結婚した、どこそこの「家」に嫁にいつた、どこそこの「家」より養子を貰つたといつて居る。卽ち結婚、緣組は特定の男と特定の女、個人と個人との關係と見ず、某「家」と某「家」との關係であるといふやうに見て居る。故に一度緣組みせばその「家」の存續する限り、末世末代迄の親類である。

三代四代前に嫁いで來たお婆さんの「家」とも今以て親族のつき合ひをして居るといふのは珍しいことではない。すべて農村等に於ける交際は向う三軒兩隣、すべて「家」と「家」との交際になつて居るのであつて、その兩家共に先代が死んで代りになつても、矢張り依然としてその交際をつゞけて行く。家と家との交際であるから、互にその家族各員の身分や緣續きの關係を知り合つて居る。それゆゑにさつぱり相互の間に心置きなく、親密に交際されるのである。然るに都會生活、殊に變化の激しい現在の東京などになると隣家であつても隣家らしい溫き交際をするのでもない。否、どこの馬の骨だか分らずに濟しておくことが多い。隣の人の吉凶禍福利害休戚などの如きは、殆んど何等の痛痒關せずといふ有樣である。然るに前述の如く隣保鄕黨の團結が緊密なるが故に吉凶禍福の際、互に慶弔したり又互に相救濟扶助することも、他人事と思はず之を爲すのである。加之斯く知り合つてゐる中であるから、制裁が互に能く屆く。從つて中々惡いことなどが出來るものではない。かういふ譯で、此の家族制度は、社會の結帶として甚だ有効なる作用をなして居るといふことも明かにせられるやうになつたのである。(未完)

――「教育學術界」第二十七卷第六號所載――

七　ストア主義と日本の武士道

日露將さに干戈を交へんとせる當時、この小僮（こわつは）如何して勝てるものかと、歐羅巴各國の人々から思はれた我が日本が海に於いても陸に於いても、まるで破竹の勢で敵軍を追ひまくり、この壯漢、如何まかり間違つても負けることはないと思はれた露西亞が、案外脆く、陸でも海でも慘々の體である。

此結果に驚いた心は、卽ち其由つて來れる所の原因を窮めようとの心である。歐米の人々は、戰爭の勝敗は器械力の鋭鈍と、精神力の强弱とに基くとの前提を置いて、仔細に其兩方面を調査して、日勝露敗の最大原因は、前者の器械力にあるよりは寧ろ後者の精神力にあるを看取したかのやうである。

精神力と謂つても二種類の區別がある。一は知力的方面で、一は意欲的方面である。精密にして遺算なく、數理の上に堅實にして小心なる作戰の計畫を立てる

のは知力の作用であつて、一度立てた作戰の計畫を、確實に保持し、勇敢に大膽に決行するのは意欲の作用である。

日露勝敗の數の定つたのは、此兩方の孰れに有るのであらう。我等は寧ろ從來の海陸に於ける敵味方の戰報を讀んで、兩者共に我は彼に優つて居るといふことを信ずるの權利あることを自覺したる者である。併しながら若し假りに兩者の內について輕重を付けるといふならば、或は意欲の作用であらうと思ふ。歐米の人々も亦然か觀察したかのやうである。

日本の意欲的精神力は何、曰く武士道。そこで歐米の人士は皆期せずして日本の武士道を研究し始めたのである。新戸部博士の「武士道」は、開戰後歐羅巴の各國語に飜譯せられて、其賣行きはいづくとも凄じい程であるといふことである。

此邊の觀察はよし中らずといへども遠からずであらう。そこで國內に於いても武士道について云々する者が開戰後甚だ多くなつたやうに思ふ。

或者は武士道といへば一も二もなく有難い者のやうに考へて、我が國民道德の要旨は必ず是でなくてはならぬ。武士道を措いて國民道德とすべき者はないと、

武士道をば餘りに善く觀過ぎる結果、其長所と短所とを取捨選擇するの暇もなく、過去の形をそのまゝに現代に應用しようとして居る。是は所謂古い壺へ新しい酒を容れようといふので、不適當である。其理由は雜誌「教育學術界」に「國民道德と個人道德」と題して載せてあるから、序に參照せられんことを願ひたいのである。

又或者は武士道は過去の遺骸であるといつて一も二もなく捨てゝしまはうとする。是も自分の本領、自分の歷史を捨てゝまるで別の者にならうとするので、鵜の眞似をしようとする鴉たらずんば幸である。又或者は武士道は尊皇を忘れ、覇道を唱ふる所の怪しからぬ主義である。武尊文卑主義であると謂つて滅茶々々に惡口をする。是は武士道といふ名に拘泥して、故らにその名目の上から武士道鼓吹論者を敲き付けようといふので、餘りに彼等の精神に同情のない、人の惡いやり方である。武士道といふ名目の宜くないことは僕もさう思うて居る一人であつて、其事は「丁酉倫理會講演集」に說いて置いた。併し言語上の名目のことは如何にもあれ、その精神に至つては、武士道鼓吹論者も、僕等と大同小異であらうと信

する。

武士道の名が不穩當であるとして、それなら如何なる名目が宜からう。矢張是迄使ひ慣した「大和魂」とか、「日本魂」とかいふ者が至當であらう。が茲では、都合上武士道といふ名にしておいて、其意味は大和魂、若しくは「日本の民族精神」といふことにしておきたい。

凡そ何事を論ずるにも其態度が二つある。一つは其事を論じて、其論を直ちに實際に適用しようといふ實地家の態度で、一は飽迄學究的態度を取つて、其事の直ちに實際に適用せられるか否かを顧みぬ理想的態度である。

是迄國人の武士道を論じたる者に實際家の態度を執つた者多く、理論家の態度を執つた者は比較的尠いやうである。今僕は暫く後者の立場に立つて論じて見ようと思ふ。而して專ら西洋に於けるストア主義と比較して見ようと思ふ。

さて此兩者を比較する上に於いて注意すべきことがある。ストア主義といふのはツェノーンが始めて之を唱道して、多くの學者之に和した一つの學說である。我國の武士道といふのは我邦に自然に發生し展開した處の道德である。從つて

一は事實で、一は其事實に關する理論である。此兩者を比較するのは雅邦氏の繪畫と、其理論と、法隆寺の伽藍と建築學とを比較するやうな者で甚だ辻褄の合はぬやうな比較である。

乍去ストアにも武士道にも理論の方面もあれば實際の方面もある。從つて其兩者の實際方面を見たならば、强ち比較せられない者でもあるまい。

今一つ注意すべきことは此主義の創唱者ツェノーンはキプルスのキチウムで生れた希臘人であり、其衣鉢を傳へた重なる人の內でクレアテスやクリシップス等も皆希臘人で、ストア主義はもと希臘に生れた主義であるが、實際生活に影響を有つて、衆人の間に奉ぜらるゝやうになつたのは、羅馬に於いてゞある。

ストア主義の哲學は唯物論的汎神論であること、而して其倫理は理性を重んじて感情を絕對的に輕蔑する主義なること、人生の理想極致は、一切の情念を絕ちて寂然不動の淨樂境に住するにあること、人格を重んじて萬人同根平等主義を執りたること、天地の悠久なる大道に則つて毅然として水火の苦を恐れざること、自殺を敢て非難せざること、實際祖師ツェノーン以下幾多の學者が自殺を遂げたること

等は、普通の西洋哲學史及び倫理學史に明かなる事であるから、今は玆に之を述べぬ。

唯前に謂つた如く、ストア主義が實際の民衆生活と接觸し、其信念を動かすやうになつたのは羅馬に於いてゞあるから、乃で僕はストア主義が如何やうにして羅馬に入り、如何樣なる影響を民衆生活に與へ、如何なる事情で漸く衰頽するやうになつたかを說かうと思ふ。而してかかる點よりしてやがて我が武士道との比較を見ようと思ふ。

ストア學派を、始めてとはいへぬが大に羅馬の國へ輸入したのはロードゥス人のパネーチウスといふ人で、紀元前二世紀に生活して居つた人である。此人が羅馬の貴族ラエリウスやシッピオなどいふ人に接近して自分の說を敎へたことがあつたことから、ストア主義が羅馬に其道を見出したのである。併し此パネーチウスといふ人の說は、純粹の、生一本のストア主義といふよりは、ストア主義を骨髓として、プラトーンやアリストテレースやの說を參酌した處の折衷的の傾向を帶びたものであつた。

此ストアの主義が如何なる事情で大に羅馬に歡迎せらるゝやうになつたのであらうか。

羅馬の共和政の晩年より、帝政時代にかけて、羅馬の物質的文明といふ者は實に驚くべきものであつた。羅馬は現今の歐洲全部を併呑して、戰勝の餘威、各地各國の方物は、すべて、羅馬都府を裝飾すべく送られたのであつた。羅馬には東西南北の奇麗であるといふ奇麗な物、高價のものであるといふ高價の者、便利であるといふ便利の物、一として集らざるはなかつたのである。

戰利品の內で、最も有效で最も勿體ない者は人間といふ戰利品――奴隸其者である。

斯かる狀態であつたから、人何んぞ奢侈贅澤に流れざるを得ん、人何んぞ浮薄婬靡に陷らざるを得んやである。

果然羅馬の道德は斯の方面よりして、共和政の晩年より、帝政時代にかけて、殆ど腐敗の頂上に達したのである。モムゼンの歷史や、ブリードレンダーの歷史を繙けば、其如何に甚しかつたかが明かに分る。それ故詳しく知りたいといふ人は其

等の書物について讀むとして、今其一端を述べて見よう。

一席數萬の金を散らすやうな宴會は一年幾度とも開かれ、富豪は互に豪華を衒ひ、互に競爭して、殆ど底止する所を知らなかつたのである。鶯の舌の羹を食ふなどは此頃の事である。遊伎娯樂といへば例のサーカスに於ける獸の格鬪である。一時に數千の象や牛やを鬪はして平氣で之を見て居つたのである。否唯に獸類のみならず、人間其者をも互に眞劍勝負をさして、今我が都人士が回向院で相撲を見るよりも平氣で血を流すのを見物するのを、こよなき娯樂として居つたのである。思ふだに慄然として顫ひ上らざるを得ない。

こんな有樣は第二ビューニック戰爭以後殊に甚しくなつて、帝政の始め、アウグスチーヌスやチベリウスや、クロヂウスやの諸帝は法律其他の方法で頻りに此道德上の頽勢を挽回しようと努めたのである。併しそは眞に燒石に水に過ぎなかつたのみならず、それが爲に却つてかくれてわるいことをするといふ陰險な氣風を養ふの緣となつたのである。

併し此んな有樣が何時までも續くものであらうか。人性の眞面目は何時まで斯かる表ッ面な抑壓に堪へて居るものであらうか。ロールをかけた麥の苗は、却つて非常の勢を以て成長する者である。

バネーチウスの手によつて蒔かれたストアの種は、羅馬に於いて見事なる莠苗を得たのである。此浮薄姪靡、殘忍酷薄なる生活中に於いて、簡朴質素、嚴厲峻辣なるストア主義の生活は漸くに頭を擡げつゝあつたのである。

バネーチウス以後如何なる學者があつたかといへば、コルヌートゥス、セネカ、ルーフス、エピクテトゥス、アゥレリウス等が其重なる者であつて、而かもセネカ、エピクテトゥス、アゥレリウス等は尤中の尤である。

簡朴質素の生活、嚴厲峻辣の生活、これストア主義の道德的生活で、レッキー氏の謂つたやうに、能くも此浮薄姪靡の生活中にあつて、其渦中に捲き込まれずに毅然として其立て前を保持して居つたものである。

簡朴質素の生活、嚴厲峻辣の生活是亦我が武士道の生活である。建武式目に、

一可被行儉約事、

近日號婆佐羅。專好過差。綾羅錦繡。精好銀劍。風流服飾。無不驚目。頗可

謂物狂歟。富者彌誇之。貧者耻不及。俗之凋弊無甚於此。尤可有嚴制乎。

一可被制群飲決遊事、

如格條者。嚴制殊重。剩耽好女之色。及博奕之業。此外又號茶寄合。或稱連歌會。及莫太賭。其費難勝計者乎。

とある。元弘、建武頃の奢侈とか贅澤とか言つた處が知れたものである。其後義滿や義政が時の贅を盡したといはれた金閣、銀閣兩寺を見てさへ、あの位に過ぎないもの、況して其以前の贅澤奢侈など、今から見れば敢て贅澤奢侈といへぬ程かも知れぬ。而もそれを八ヶ間敷く禁制した精神は、果して何處にあるかゞ分る。

賴朝が部下を訓誡せる中にも、質素儉約を旨とすべきを說き、信玄家法にも之を說き、山鹿素行は、

大丈夫內淸廉を守らざれば公につかへ、父兄にしたがつて利害此に崩して天性の心を放つべし。淸廉と云は外の賄賂內の財貨さらに心に付かずして世人の難行所に卓爾と立て更に不屈之を淸廉と云へり云々、

と辨じて、士道を明かにして居る。

簡朴質素の生活が實に我が武士道の理想的生活であつたのみならず、實際之を實現した武士は澤山ある。素行其人の如きも一のタイプで、溯つては最明寺入道の如きも一つのタイプの標本である。

簡朴質素の生活、武士道の生活とは神世以來の我が民族精神の特徵の一つで、無論武士といふ階級に限られた道德ではない。是は既に他にも說いた通り、武士道其者が我民族精神に過ぎないから當然のことである。誤解さるると困るから、一言斷つて置く。此以外に述ぶる諸德も皆同じことであるから、其時には一々斷らぬ。讀者諸君に豫め御承知を願ひたい。

放蕩贅澤をし盡した富豪の息子が、一朝其淫靡浮華なる生活に飽いて、却つて質朴簡易を喜ぶやうになるやうに、羅馬の人士は一度其惡夢から覺めて、人性の眞面目な方面に立ち歸り、其反動として、ストア主義を歡迎するやうになつたのである。明治の今時に元祿の風俗を夢みて居る人々は何時か覺むべきである。併しストア主義が羅馬に歡迎せらるゝやうになつたのは、唯に此反動ばかりではない。羅馬人の深い理想と、ストア主義との間には或る默契があつたのである。

羅馬の人間は實際的の人間である。活動的の人間である。靜坐瞑目天地人生の道理を觀念するよりは、武器を執つて四隣を征し、舌を振つて公衆を統御する方の人間である。而も之が爲に風厲卓發、祖國の爲には水火の苦をも避けざる精神のあつた人間である。羅馬の軍、攻むれば必ず取り、戰へば必ず勝つを得たのは、全く此精神があつたからである。

ストア主義は理性を重んじて、感情を輕んずる所の主義である。一切の感情・情緒は、喜・怒・哀・樂・愛・欲の差別なく、すべて邪惡の根本として之を退けた處の主義である、つまり情海の波瀾怒濤を抑壓して、毅然として自己の節操を變へぬのである。即ち意志の剛强を以て最も肝要なる德義と見て居つたのである。

此意志の剛强、これ羅馬人の理想と、ストア主義との間に默契のあつた點である。意志の剛强は羅馬人の生命である。羅馬人士がストア主義を歡迎したのは、これ自分の生命を歡迎したものに外ならぬ。

意志の剛强、又これ我が武士道の理想である。生命である。ストアの主義と我が武士道との間に類似の點ありとせば、この點が其尤なる者であらう。

我が武士道は卑怯未練といふことを蛇蝎視したのである。そは利害の情念の爲に、或は一身一家の私情の爲に、或は自己の薄志弱行の爲に、守るべき操を售り、進むべき道を踏外づすことをば、最も嚴刻に、莊重に警戒したのである。武士にして秋毫たりとも卑怯の擧、未練の徵があつたとなれば、彼は最早武士の資格を落し、武士として交際することを得なかつたのである。卑怯だ、未練だといふ噂を立てられたといふことが口惜しいとて切腹をした武士さへあつた。

武士の道は忠君である。節義・忠信である。之が爲には、之を確守せんが爲には如何なる難行苦行も何とも思はなかつたのである。忠臣藏や仙臺萩やは此理想を體現して殆ど遺憾ないものである。

山鹿素行の士道に、

大丈夫の世に在る剛操の志あらざれば心を存すること不能也。剛は能く剛毅にして物に不屈を謂也。操は我義とする志を守て聊か不變の心也云々、

と說いて居る。見るべし我が武士道の精神何處にあるかを。

德を最尊最勝の本尊となし、之に達せんが爲には世の悲痛辛苦何かあらんとい

ふ剛毅の意志を尙んでストア主義は、我が武士道と一心同體と言つても過言でない。

斯くの如き來歷でストア主義は羅馬に入つたが、羅馬に入つてから其道德的生活上に及ぼせる影響はこれのみではなかつたのである。

ストアの主義は一切情念の享樂を絶つて寂然不動のアパタイアの境涯に入れるを聖人となし、之を其理想としたのである。

大に羅馬にストア主義を傳導した處のパネーチュスは、凡そ聖人といはれん程の者は必ず此アパタイアの境地に住せなければならぬが、すべての凡人はさうは行かぬ。多少情念の享樂といふ者をも許さねばならぬ、と說いて、從つて羅馬の初期のストア主義者たるケートーやシセロやは(此兩人をストア派と見ぬ學者もある)、德を活動と解したのであつた。

然るに後期のストア主義者は、漸く昔の風を復興せしめて、自己吟味を主とし、心を靜寂の中に住するを理想とするやうになつた。餘程宗敎的になつて來て、殆ど我眞宗の信仰に近くなつて來たのである。其代表者はエピクテトゥスやアゥレリウスやである。

アゥレリウス帝の「瞑想錄」は人生の煩悶苦鬪に對する最も有効なる慰藉者である。僕は不平不滿のある時、心のじれつたい時、はがゆい時には、此「瞑想錄」を引出すのである。レッキーが、此書を評して、「あらゆる書物の中で最も人を沈痛ならしむる所の一つである。あらゆる宗敎的文書の中で、最も醇美なるものゝ一つである。」と謂はれたのを、僕は決して過褒と思はぬ。

「運命」(プロヴィデンス)の前に不平あるな、煩悶あるな、これエピクテトゥスや、アゥレリウスやの根本精神で、羅馬の人士は尠からず此理想の感化をうけて居る。

安心立命、これ又我が武士道の精神である。佛の道で此を得たものもあり、儒の道で之を得たものもある。信仰異るも安命の地步を得たのは一つである。

素行の論中に、

凡そ命と指處は人の造爲して不叶天自然に其形をなし、其理事あらしむる是を命といへり。(中略)。されば養生を盡して命こゝに縮まり義當さに死に當るに至る。是則命也。云々。

又曰く、

人として天命に安ずる處あらざれば此に妄動妄作して實地を踏むこと不能と云へる也。云々。

其他ストア主義が、其萬人同根平等主義によつて、奴隷制度を破壞し、その人格主義によりて羅馬法の發達を促したなどは、大切なることである。併しそのことは餘閑がないから說くことが出來ぬ。

此人格思想は我が武士道に缺けて居る所であらう。これは已に本雜誌に綱島梁川君も論ぜられたやうであるし、又吉田賢龍君も丁酉倫理會で論ぜられて居るし、又僕も既に說いたのであるから、今は省く。

――「中央公論」明治三十八年八月號所載――

八　愛國心の要素

今日は「愛國心の要素」といふことをお話致すので御座いますが、是は愛國心研究の一節であります。お話に先つて茲に御斷を申して置かなければならぬことは愛國心の「國」といふは、國家學上でいふ所の嚴密な意味で申すのでなく、唯、漠然と、その大小に拘はらず、人類の自然に團結して成せる獨立團體といふ程の意味に限定していふのであります。何卒其の積で、御聽取を願ひます。

偖て以上の意味の愛國心を構成する要素を一々數へ擧げて見ると隨分色々のものがあります。今此處では、それ等の中で顯著にして、而も比較的重要なるものと考へらるゝ所の四五の要素を列擧して見たいと思ふ。先づ第一に愛國心の中には、自分の生れた、若しくは自分の生活した處の場所を愛すると云ふ精神が含まれて居ると云ふ事を數へたいのである。御互が――マア此處には純粹の江戸ッ子

の方々も居らるるか知りませぬが、地方から出て來て居らるる方々も居らるゝと思ひます。否多分その方が多からうと思ひますが、斯うして東京に居れば、東京は流石に帝國の首府だけに、人物から、都會としての設備から、娯樂の機關から、交通の機關から、何から何まで備つて居つて、幸福に愉快に生活するのに都合の宜い樣に出來て居るのでありますが、奇態なることには、此の便利な愉快な都會に住んで居りましても、地方から出て居る人々は私初め、恐らくは何誰でも、幾何ら淋しい片田舍でも自分の生れた、育てられた、生活した鄕里をば戀しく、なつかしく思ふものでありまして、時には國へ歸つて見たい、自分の鄕里へ歸省して見たいと云ふ感じを起すのであります。この鄕里へ歸省して見たい、國へ歸へりたいと云ふ心の中には、色々複雜した分子が含まれて居るのでありまして、それは段々後に述べる積でありますが、兎に角その一の要素としては、確かに自分の嘗て生れた、育つた、生活した所の鄕土を愛すると云ふ心が籠つて居ることは疑ひない。卽ち彼の山、彼の水、彼の神社の杜、すべて自分の生命を開き、それを寄託せしめた處のものである。所詮、鄕土の一木一草皆自分の愛着心の種とならぬはない。それでありまするから

して、自分の生れた場所に對しては、人は特別の情愛を懷くものであります。啻に生れた場所に限らず、自分の長く生活して居つた場所に對しても、愛著心を起すものであります。私共は斯うして東京には只借家住ひの寄留でありますけれ共、長く東京に住んで居りまするとと又東京が戀しくなる。何處か地方へでも旅行でもすると、東京に歸り度なる。又京都あたりへ行つて、京都は山水明媚の宜い處で、東京は殺風景な處であるなどと評されると、自然何とか辯護して見たくなるやうな譯で、人は兎角自分の生れた場所とか、長く生活して居つた場所とかをば、愛するものであります。是れは人間の本來の性質で、文明人にも野蠻人にも等しくある所の心であります。此鄕土を愛すると云ふ情操は、確かに愛國心を構成する重要なる要素であります。ウェスターマルクの集めた材料のうちに斯う云ふ話があります。マダカスカルのホヴァといふ土民は、自分の鄕土を愛する精神が非常に强く、チョッとでもその鄕土を離れて旅に出る事を嫌ふ。けれ共若し彼等が止むを得ずして旅に出る樣なことがある時には、何處か自分の住まつて居る所の土塊を持つて出掛ける。さうして旅先きで、毎朝毎夕、其一片の土塊に向つて禮拜して、神よ願く

ば此旅行を安全ならしめ、此一片の土塊を元通り取りし場所へ返すことを得せしめられんことを、と云つて祈つて居るさうである。又ソロモン諸島の土民等は、植民の爲に、フィジイ島や、クインスランド等へ送られて、それで、自分の生れ故郷が戀しさのあまりに、遂に自殺するに至るものさへ珍らしくはないとの事である。

此郷土を愛すると云ふ精神は土地そのものに對する人間の情愛であつて、一定の土地に長く生活して居れば居る程その情愛の深くなるのは當然のことである。從て所謂水草を追ふて轉々して居る所の遊牧民族よりも、一定處に止住して、先祖以來同じ土地に住まつて、同じ土地を耕やすやうになつた農業時代の民族に、其精神の强かるべきは當然のことであるが、しかし所謂遊牧時代にとて、土地を愛する精神がないのではない。例へばキャリフォルニヤの附近に居る土民中で、ニシナムといふ民族は、最も純粹な遊牧の狀態に居るのでありますが、夫れでも矢張り郷土を愛するの精神に滿たされて居るのであります。それ故に遊牧時代の民族には、郷土を愛する精神がないのではありませんが、しかし農業時代になれば、それが更らに强くなるのは、事實上からも、理論上からも確かなことであります。夫れで我が日本の事を見ますると、日本は神代の頃からして農業が行はれて居つた樣に見える。天照太神が民に養蠶、稼穡の道を敎へさせ給ひし事が見えて居りまするし、又降りて神武天皇の御代にも農業のことが見えて居ります。して、我が國の產業は、餘程古代から行はれて居つたものに相違ありません。從て初から一定所に止住する生活が行はれて居つたのでありまして、從て我々日本民族が、此の國土を愛する情愛の深いのも、當然な譯であります。それに、土地について今一つ我が國に特殊な事情があります。それは、我が國は四界海を廻らして居る所の島國であつて、他國に轉ずることが容易でありません。此土地で生れて、此土地で終らなければならぬのが最大多數の運命であつたので、飽迄この土塊と始終するといふ處から郷土を愛する我等の精神は一層の强さを增した譯であります。これが第一。

第二には血族關係のあるもの及び朋友、知己、利害關係の密接に固著して居るものを愛するといふ心が、愛國心の第二の要素であります。凡そ人にして父子兄弟共に相親しみ相愛せざるものはありません。父子兄弟の相親愛するは、既に動物中にも見ゆる心で、人間がその遠祖から遺傳して來た精神といつても宜いのであ

ります。先刻申しました、我々の鄉里に歸りたいと云ふ心も、一つは、前に申した鄉土を愛する心でありますが、一つは、彼所に在ます所の父母を思ひ、兄弟を思ひ、親戚を思ふからであります。それで鄉里に、父母も、兄弟も、親戚もないといふやうになれば、鄉土を愛する心はありながら、「鄉里」といふ心は餘程弱くなり、薄くなるのは事實である。夫れで其の父子、兄弟、親戚、知己、相親愛する心を、人間自然の情だと言ひまするが、其人間自然の情が愛國心を構成する第二の要素なのであります。先きに御斷り申しました通り、こゝにいふ所の愛國心の「國」は、國家學上でいふが如き嚴密な「國」でなく、漠然と多數人間の獨立した生活團體を指したのであるが、其の意味の國家を形成する所の國民は、事實上の血族關係もあり、又事實ではなく、單に想像上、傳說上の血族關係もあり、又は色々の血族のものの集合して居ることもあるのであります。事實上にしろ、想像上、傳說上にしろ、血族關係があると思へば、その間の相互の關係の親密になるべきは、固より當然の事であつて、それはいふまでもないのでありますが、然らずとも、互に相團結して一生活體をなして居ると思へば、自然に互に相親愛するやうになるものでありまして、これも人情の自然であ

ります。從て此の心も、すべての民族中にある所の心でありまして、例へばアラビヤ族のベトゥーイン族の間には、幾つもの小區別あつて、平常はそれ等の間に互に爭ふたり、戰をしたりして居るが、さて一旦外敵があつて、此の民族に危害を加へることのある場合には、彼等は猛然立つて一致してそれに當ると云ふことである。又ポリネシヤのトンガ族にては、各部落は、各、既にその島を愛するのでありますが、同時に又、トンガ族の住んで居る全島嶼を愛しまして、之を以て一つの國を形成するものと見、彼等はすべて兄弟姉妹のものとして、互に相親愛して協同一致して居るといふことであります。是等は親子兄弟血族關係は、如何に彼等をして相親愛せしむるものであるかを示すものであります。

然るに我等日本人は如何であるかといへば、君臣同祖で、皇室を大宗家としたる所の同族である。即ち日本國民全體が一大家族をなして居ると、斯う云ふ感じを持つて居るのであります。之を實際の事實から精密にいひますれば、必ずしもそうのみはいはれないのでありますが實際はさうでないとしても、即ち一つの想像にしても、兎に角我々大和民族は、すべて同一の祖先から生れて來た處の同胞であ

るといふ考へがありますので、それで國民としての團結力が甚だ強いのであります。かういふ譯で、一國を構成する所の民族の間には、互に相親愛するといふ情が自然にあるものでありまして、學者は之を族情(レーシアル・フィーリング)といふて居ります。

それから第三の要素は言語であります。言語も餘程面白い作用を持つて居る。私が斯うして御話を致して居る中にも、諸君は定めし、藤井は東北者に相違ないと、直ぐに御氣付きのことでありませうが實際それに違ひありません。私がこういふ席なり、學校で講義する場合に於ては、言葉から、調子から、發音から、努めて普通語を使ふ樣にと苦心して居るのでありまして、若し之が日々の人間と話でもする場合には、只今のとは異つて、諸君には殆んどお分りにならぬであらうと思ふ所の言葉を使ふのであります。それは必ずしも故意にそうするのではありません。そういふ國言葉でありませんと、話す人、聽く人の感情が、どうもピタリッと合ひ兼ねて、如何にも知らぬ他人に會つたやうな、素氣のない、手持無沙汰の感がせられるので、それで自然國言葉を遣ふのであります。こういふことは、恐らく諸君の多くの方

方も實驗せられて居る事柄であらうと思はれますが、所謂方言といふものには、一種いふべからざる微妙の情愛が籠つて居るもので、從てその方言を遣ふ人人をも戀しく思ふやうになるものであります。之は方言のお話でありますが、同じ道理で、一國民、又は一民族の話す言葉は、世界の上から見れば、一種の方言な譯でありますから、矢張り同じ言葉を遣ふ人人は、その言葉の上から、自然に相互に親愛して、一致團結するやうになるものであります。然るに此の言葉は、時として國の範圍と同一でないこともありますから、一國內で數箇の國語が話されるやうな場合には、國の上から見れば、却て一致團結を害するやうなこともあります。たとへば澳勾國の如きはその一例でありまして、澳國は獨逸語、勾國は勾國語であつて、一國に二ケの國語が行はれて居りますので、如何うも具合が宜くないことが折々あります。瑞西の如きも如何でありませうか。瑞西には伊語、佛語、獨語、三ケ國語が行はれて居りますので、瑞西のカントンは如何にも強い團結を有つて居りますが、瑞西全體としては、如何うもさう團結力が強いとは申されないやうであります。之に反して、同じ言葉を遣ふ場合には、國が異つて居つても、之を結付ける力あるやうに思ふ。

獨乙と、瑞西の一部及澳太利とは、言葉が同じであるが爲に、色々のことで結付けられて居ります。故に一國語が數ケ國に行はれて居るか、又は一國内に、數ケ國語が行はれて居る時には、言語を愛する情と、愛國心とは、互に相反するやうなこともあるのでありますが、併し若し一國には一國語のみ行はれてゐる場合には、それが緣となつて愛國心は大に喚起せられるのであります。それで西洋人は斯う云ふことを言つて居ります。野蠻民族の間に這入つて行つて彼等と親しくなつて、研究をしたり、取引をしたりするのに便宜を得ようといふ秘訣の一は、土民の言葉を一言でも二言でもよいから、夫れを遣ふにあるといふて居る。成程、人種も何も異つた他人から、一寸した言葉でも自國語を言はれると、何となしにその人の親はしい樣な感じのするものであるに相違なく、是は野蠻人に限つた譯でなく、文明人にもある事でありまして、私が先年西比利亞線で歐羅巴から歸へりました際に或停車場に著きますと、そこに立番をして居つた兵士が我々日本人を見まして、直ぐに「今日は」と云ふ一言をいふたのである。我々はシベリヤの曠野の中で、一言の日本語をも聽かうと待ち設けなかつたのに、不意に此の一言を聽いて大にその人が懷しく

なつて、そこで、その兵士と、色々の話をし、持ち合せて居つた煙草抔をやつたりしたことがありました。こんな具合のもので、言葉は、妙に人を引き付ける力のあるものであります。

我が日本は、臺灣、朝鮮、樺太を入れない以前は、一國一國語の國で、その方からの團結力も中々強いのであります。成程支那の漢語が澤山這入つて來、又明治になつてからは、もろ〳〵の外國の言葉も這入つて來まして、チョッと異樣な色着けを與へたのでありますが、併しながらそれは多くは單語でありまして、國語としての語法、文章法は變らない、矢張り依然たる日本語であります。最近五六年以來ローマ字論が八ヵましくなつて居りますが、私は主義としては、ローマ字の贊成者でありますが、ローマ字を遣つたからとて、一派の論者の樣に、我が國の國語を傷けたり、國體を動かしたりするものでは斷じてないと信じます。しかし、こういふ論の出るのを見ましても、國語は、愛國心の要素として、如何に大切なものであるかが、分ると思ふのであります。又國語には、所謂お國自慢の甚しいものが伴ふものである。佛蘭西では獨逸語は野蠻の言葉だと言ふし、獨逸では、學術語としては我が獨逸語が

世界中一番宜い國語であるといふし、それ〴〵自分の國の言葉が一番良いものとして、お國自慢をするのである。これを以て見ても、國語は如何にお互を結び着ける力があるかと云ふことが分ると思ふ。

第四には社會の風俗、習慣、制度、文物を愛するといふ心が愛國心の重なる要素の一つとなつて居るのであります。是れも、矢張り個人方面から考へると分りますが、個人方面から考へますると、我々が一家を構成して居れば、そこに必ず一家の風がある。其家風と云ふものは、なんとなく嬉しい。一家の家風が外の家の家風と如何に異はうとそれは構はない。何んでも自分の家の家風がしたはしく、それが懷しい。さうしてそれに服從して、それを保存しようと努めて行く。のみならず同じ家風の下に立つて居る所の人々は、それがためにも亦團結を強くせられるのである。此の一家族が家風に從ひ、之を愛し、之を保存しようといふ精神は、民族全體の上にも現はれて居るのであります。各民族には、銘々のカストムスを愛し、之に服し、之を重んじ、之を保存しようと云ふ精神が甚だ強く表はれて居るのである。彼等は何んの爲めに自家の風習を守らねばならぬか、どうしてそれに從はねばならぬか、などといふ理由は毫も問ふこと無しに唯、我々の祖先以來やつて來た事であるから守ると云ふだけである。實に野蠻人の風習を重んずる精神の強い事は、不思議な位である事例は、澤山あります。是は文明人にも同じことで、之を重大なる方面からいへば、團體とか、或は國の風俗とかいふものは、人人はすべて之を重んじ之を愛し、又人を團結せしむるものでありますが、その輕小なるものは、一時の流行なども人の愛著心を惹き起すものでありまして、明治維新當時の人人には、彼等のチョン髷を切ることは、中々の大事件であつたことなどは、如何に一寸した風俗でも、如何に人を愛著せしめる力あるものであるかを示すものであります。

夫れから第五は感謝の念であります。感謝の念も、個人の方面から見ても分るのであります。吾々が父母に依つて育てられ、兄弟に依つて助けられて成長して來ると、それ等に對する感恩報謝の心が自ら中から湧いて來る。此の父母に對する感恩報謝の念も、一般にあるものであつて、文野の如何に拘はらないのであります。之が愛國心の重なる要素であります。支那や日本の儒者や政治家の書物には、愛國と云ふ言葉はあることは勿論ありますけれども、それよりは、憂國とか、報國

とか云ふ言葉が多く遺はれて居る。一死國に報ゆると云ふ言葉は、楠公の言葉の中にも、若しくは廣瀬中佐の言葉の中にも見えて居る。彼の靖獻遺言の著者として有名なる所の淺見絅齋と云ふ人は、刀の小柄に「赤心報國」と云ふ四字を鐫り付けて居つたと云ふ事である。日本に於ては報國と云ふ字が、愛國と云ふ字よりも、寧ろ多く使はれて居るのであります。殊に注意すべきは、西洋の學者達で、愛國心の研究をした者が大部ありますが、私の今まで調べた限りに於ては、愛國と云ふ事に對して、吾々日本人が了解して居る所の報國と云ふことを、愛國心の要素の中に數へて居る人はまことに少いやうであります。然るに吾々日本人に取つては、之が最も重要なる愛國心の要素の一つになつて居るではないかと思はれます。吾々日本人の愛國心には、鄕土を愛する、大和民族を愛する、又日本の文物制度を愛すると云ふこともあるには相違ないが、併しながら夫れ以上に重大なるパートは、報國、國民は祖先以來深於海高於山皇恩に浴して、御國の御蔭を蒙つて居るから、どうかしてこれに報いたいと云ふ精神が、餘程重要な働きをして居るものではなからうかと思ふのであります。

第六には忠君である。君に忠と云ふことである。これも個人の上から見ると分るのでありまして、是れを一家の上に見ますと、所謂族父制、卽ち一家に、家長と云ふ主權者があつて、家長は家を代表し、家族のすべては其家長の命令に從ふと云ふ制度、これを族父制と云ふのであるが、西洋の歷史では、羅馬に最も發達した制度であります、その制度に於きましては、家長は家そのものと同一視せられ、家族は總て家長に絕對に服從し、之を尊敬するのは、取りも直さず、其家そのものに盡す所以であると云ふ風に考へたのであります。その場合と同じやうに、一國の君主と、一國そのものとを同一視する國柄にありましては、忠君卽愛國、愛國卽忠君となるのであります。佛國革命當時には、愛國といふ言葉は、殊に所謂勤王黨に對して遺はれた言語でありまして、その語そのものは、忠君と丸で別にされて居るのでありますが、しかし實際の歷史に於ては西洋に於ても、忠君と愛國と一致したり、離れたりしたのである。英吉利の歷史丈けを見ましても、忠君と愛國とは、合したり離れたりして居るのであります。

我が日本に於ては、此忠君は、愛國心の最も重要なる要素でありまして、忠君卽愛

國、愛國卽忠君となつて、決して渝らないのであります。忠君も、報國と同じやうに、愛國と云ふ言葉よりも、多く使はれて居る。持統紀に見えて居りまする「愛國」といふ文字にも、――是は日本の典籍に「愛國」といふ文字の見えた最初だと申すことでありますが――それにもミカドを思ひと訓じてあります。卽ちミカドは天皇であり、國であるやうに遣はれて居るのであります。されば日本に於ては、忠君は、愛國の最も重要なる要素の一となつて居るやうであります。

第七は、自國の傳說、歷史を愛し、かねて、自國の國土及び民族を世界中最も宜い國土、宜い民族と思ふ精神であります。この精神は、あまり度を過ぐれば、誇大妄想狂になつてしまふのであるが、併し適度に自分は偉いものだ、自分は秀逸卓絕な人間であると云ふのは、大に自重自愛の精神を養ふに、有効であらうと思ひます。貝原益軒が五條訓の中に、「我が日の本は天地の內において、南北の中央にあること中華と同じければ、日月のめぐれる道正しく、四時そなはり、寒暑陰陽の時にたがはざること、四夷の諸國にくらぶるに、すぐれたる善國なり。云々」といひ、吉田松陰は「凡生皇國、宜知吾所以尊於宇內盖皇朝萬葉一統、邦國士夫、世襲祿位、人君養民、以續祖

業、臣民忠君、以繼父志、君臣一體、忠孝一致、唯吾國爲然」といはれて居る。此等の言の中には、今日より見れば、まことに可笑しい事もあるが、しかし、自國の歷史、傳說、國土、民族を一番宜いものと見る精神の表はれて居るのであつて、是は印度にもある精神である。支那で、自國を中華といひ、他國を東夷西戎南蠻北狄などといひ、希臘で、自分等をヘレーネといつて、他民族をバルバーレンとよび、ヘブライ人は、天地に於て最も麗しい國はヘブライである、これ程樂しい國はないと云ふことを信じて居る。其他エジプトにも、アッシリアにも、世界到る所に同じやうな思想があります。エスキモー民族では何か失策でもすると、お前は馬鹿な人である、丸で白人のやうなことをする奴であると冷罵するさうであります。斯う云ふ自國を尊ぶと云ふ精神は、何處にもある精神であるが、是が又愛國心を形作る所の要素であります。

以上七つは、愛國心の重なる要素のものと思ふものを申し上げたのでありますが、しかし要素は、右七つより少くはなし、七つより多くはないと云ふことを言つたのではありません。七つより以外にもあるかも知れず、七つより少くすることが出來るかも知れないが、兎に角これ丈けを言つたのである。今一つの誤解のない

やうに申上げたいのは、今日は、唯愛國心を形成して居る要素は何であるかと云ふことだけ擧げたので其れ等の互々の關係や又それ等の價値のことについては申し上げたのではないのであります。その價値關係といふことは、別の問題になるのでありますから、今日はそれを省いて、只愛國心の要素を列擧した丈に止めて置くのであります。

――「丁酉倫理講演集」天正二年一月號所載――

昭和七年九月二十五日印刷
昭和七年九月三十日發行

藤井博士全集　第七卷
定價三圓五十錢

版權者　藤井元一
大杉印刷所　小原國芳
編輯・印刷・發行者
發行所　東京府下町田町木町田　玉川學園出版部　振替東京二六六五番　電話町田六八番
發賣元　東京市外西大久保五一五　玉川學園出版部　振替東京一五四二三番　電話四谷四六四八番

藤井博士全集

（卷號）	（書名）	（分冊）	（合本定價）	（分冊定價）
第一卷	BA倫理學方法論 倫理學研究		三、五〇	一、五〇〇
第二卷	主觀道德學要旨		三、五〇	三〇〇
第三卷	倫理學原論		三、五〇	三〇〇
第四卷	BA正義の研究 國家の倫理		三、五〇	一、五〇〇
第五卷	BA倫理と經濟 マルキシズム批判		三、五〇	一、五〇〇
第六卷	國民道德論		三、五〇	三〇〇
第七卷	BA倫理教育 日本特有道德の研究		三、五〇	一、五〇〇
第八卷	BA現代思潮批判 自然の世界から理想の世界へ		三、五〇	一、五〇〇

哲學講話　文學博士　紀平正美著　二、〇〇

西洋哲學史　大阪高校教授　岡野留次郎著　二、〇〇

支那哲學　大谷大學教授　浦川源吾著　二、〇〇

印度哲學　京城大學教授　手島文倉著　三、五〇

現代の宗教哲學　文學博士　赤松智城著　二、〇〇

教育學の諸問題　廣島文理大教授　福島政雄著　二、五〇

近世教育史論　廣島文理大教授　長田新著　二、〇〇

心理學　京都帝大助教授　文學博士　岩井勝二郎　久保良英著　一、五〇

美學史　成城高校教授　相良德三著　二、〇〇

純正社會學概論　成城高校教授　銅直勇著　二、〇〇

自然科學概論　理學博士　石原純著　二、五〇

玉川學園出版部

文學概論	文學士 相良德三著	二、〇〇	
西洋美術史	京都女專教授 伊勢專一郎著	三、〇〇	
ペスタロッチー全集（全六卷）	各卷	上並二、〇〇	
ウインデルバンド哲學概論	文學士 清水清譯	三、〇〇	
ペフレール人の教育	小原國芳譯	三、〇〇	
ウェール教育藝術の理論と實際	成城高校教授 相良德三譯	三、八〇	
カンヂンスキーの藝術論	小原國芳譯	六、〇〇	
近代支那の政治及文化	文學博士 矢野仁一著	三、五〇	
教育と內省	文學博士 岡部爲吉著	三、八〇	
宗教教育の理論と實際	小原國芳編	二、五〇	
母のための教育學	小原國芳著	二、五〇	

玉川學園出版部

教育の本質觀	京大教授 小西重直著	一、二〇	
勞作教育	文學博士 小西重直著	一、五〇	
玉川塾の教育	小原國芳著	一、五〇	
獨逸學校改革の精神	甲南高校教授 黑川惠寛著	一、〇〇	
ペスタロッチーを慕ひて	小原國芳著	〇、八〇	
ペスタロッチーにふさはしき妻アンナ	ザイフアルト著 市村秀志譯	一、〇〇	
ペスタロッチーに生きる	文學士 有馬良治著	一、〇〇	
ペスタロッチー遺跡巡禮	廣島文理大教授 福島政雄著	一、二〇	
若き日のペスタロッチー	成城高校教授 細井次郎著	一、八〇	
公民教育の根本問題	東北帝大教授 廣濱嘉雄著	一、〇〇	
吉田松陰とその教育	文學士 後藤三郎著	一、〇〇	

玉川學園出版部

數學教育の根本問題　理學博士　小倉金之助著　二、〇〇

綴方教授の根本問題　文學士　淺山倚著　一、五〇

理科教育の根本問題　成城學園測導　松原惟一著　一、五〇

本間全集（全五巻）　本間俊平著　一、三〇／四、五〇　一、二〇／五、〇〇

三浦全集（全二巻）　三浦修吾著　各一、八〇

秋吉臺の聖者　本間先生　小原國芳著　一、五〇

ハルナツク基督教の本質　山谷省吾譯　二、五〇

オツトー聖なるもの　山谷省吾譯　二、五〇

ヒルティー宗教論文集　上下　黒崎幸吉譯　山田幸三郎譯　各二、八〇

伊太利紀行　文學士　太宰施門著　三、三〇

百濟觀音　文學博士　濱田青陵著　四、四〇

玉川學園出版部

終